

## スタッフエッセイ NO106(2006.5.23) ~ 120(2006.7.25)

106	この教科書がすごい！	新藤 理	2006.05.23
107	A子のこと	芳賀 慈	2006.05.25
108	「応援のかたち」・その1	金澤拓紀	2006.05.26
109	「学力を育てる」	亀貝一義	2006.05.27
110	『へんな子じゃないもん』を読む	木村玲子	2006.05.31
111	「悩める子犬たち...」	杉野建史	2006.06.01
112	チューリップ	田房絢子	2006.06.06
113	卓球魂	畑中紀世彦	2006.06.14
114	海を渡って	芳賀 慈	2006.06.15
115	新藤が9人	新藤 理	2006.06.18
116	「青春なのだよ～。これら全部が！」	杉野建史	2006.06.30
117	歩く	芳賀 慈	2006.07.04
118	33キロ強歩	亀貝一義	2006.07.05
119	「応援のかたち」・その2	金澤拓紀	2006.07.12
120	また夏が来た	田房絢子	2006.07.25

### 106 この教科書がすごい！ 新藤 理 2006.05.23

フリースクールでは四月からカリキュラムを再編し、新たに「中学・国語」の時間を設けた。今までは「漢字」「ものがたり」の時間に分かれていたものを、より総合的に取り組むための時間である。

今年度は中学の教科書改訂の年で、国語の教科書も見た目・内容ともに一新されている。どんなに内容豊かな名作がふんだんに掲載されていても「退屈」というイメージで語られがちな国語の教科書だが、最新版は違う。中学三年生用を持ち帰り、電車でも家でも読みふけてしまった。面白いのだ、これが。

もちろん『おくのほそ道』や魯迅の『故郷』など、定番も忘れられてはいない。でも、その他に並ぶ名前は、村上春樹・川上弘美・佐藤雅彦・穂村弘...敬称略で書くのが心苦しいほどの、私の大好きな現代文学者がずらり。中学生向けに教材化しようとはなかなか思わないラインナップである。イッセー尾形・吉永小百合のエッセイなんかも載っている。

中でも一番度肝を抜かれたのは、野坂昭如氏の戦争文学。これまでの平和教材とは明らかに違うこの異様な力を、中学生たちはどう受け止めるのだろう。

「十月、フィリピン上陸、日本軍もがんばりましたが、二十年に入ると、逃げるばかり。いよいよ台湾か沖縄か。沖縄でした。四月一日、沖縄本島の中央部西海岸に、水平線を埋めつくして、鬼畜アメリカの軍艦が並び、一斉に射撃開始。何百隻もの、漁船とは比べものにならない速い舟で、上陸。日本軍は何もしない。鬼畜を陸に引っぱりこみ、トンネルに隠れて、待ち伏せ、お墓、ガマにも兵隊が立てこもり、ここしか居場所のない哲夫たちは追い出されました。戦争は人間どうしの殺し合いです、敵を殺す道具を持っている兵士の方が偉いのはしかたがない。」(『ウミガメと少年』より)

戦争という、本来は言葉で描きようもない、巨大なむごたらしい力。野坂氏は、その内実に少しでも拮抗するエネルギーを言葉に持たせようとしたのだろう。そのすさまじい苦闘から、やが

ておぼろげに形となる平和への思い。国語の時間でこそ成せる平和教育である

#### 107 A子のこと 芳賀 慈 2006.05.25

卒業生のA子から、突然手紙が来た。02年の暮れに病気で亡くなったS先生のお墓参りがしたいという。今の自分があるのは、S先生のお陰だと手紙には綿々とつづられている。

A子と初めて会ったのは、彼女が小学5年生のとき。当時の私は自由が丘でボランティアをしながら塾と家庭教師で生計を立てていた。「家庭教師は女の先生が良い」という彼女の希望で、私を彼女に紹介したのが先のSさんだった。

アトピーをからかわれ、正義感を疎まれ、彼女はクラスで孤立していた。中学校入学後、それは顕著になり、間もなく自由が丘学園に入学した。学園でも、自分の責任を果たさない人、時間にルーズな人には厳しい言葉をかけ、「私は1人が良い」と主張していた。

その彼女が、高校時代にアルバイトを始めて少しずつ変わってくる。求められている実感が、彼女を勇気づけ自信につながっていったのだろう。専門学校卒後の就職先はうまくいかなかったものの、ほんの少しの休養ですぐ次の仕事の面接に行った。その仕事を始めて半年が経ったという。今彼女から聞こえてくる言葉は、周囲への感謝や労い、思いやりに満ちている。「立派ではないけれど、自分なりに頑張っていることを、S先生に報告したい」。手紙はそう結んでいた。

#### 108 「応援のかたち」・その1 金澤拓紀 2006.05.26

サッカーのワールドカップドイツ大会開催まで2週間余りとなった。Jリーグが発足したのは私が高校生のときだったが、その頃はスポーツの世界大会といえばオリンピックを連想するくらいで、ワールドカップというサッカーの世界大会が60年以上も前からあったことなど知る由もなかった。それが今では、自由が丘の女子生徒の間でも、「宮本ってカッコイイよね～」などといった会話が繰り広げられるようになっている。この十数年で、日本でもワールドカップの認知度が格段に上がったことは間違いないだろう。

私が初めてワールドカップのことを知ったのは、「ドーハの悲劇」で知られる1993年のアメリカ大会アジア地区最終予選のときだった。当時は寄宿生活で、部屋へのテレビ持ち込みは禁止されていたのだが、対戦相手だったイラクに試合終了間際に同点ゴールを決められ、本大会への初出場が絶たれた瞬間に、「あ～～あ・・・」という溜め息が夜中の廊下に響き渡っていたことを今でも覚えている。

日本が初めて本大会への出場を果たした98年のフランス大会開催時、私は船で南米方面を航海していた。ブラジルのサントスという港へ入り、上陸して町を歩いていたときにちょうどブラジルの試合が行われていたのだが、ブラジルが点を入れるたびに町のあちらこちらから花火（爆竹!?）の音が聞こえてきたのには驚かされた。その翌日には、お隣の国・アルゼンチンの試合が開催されていたのだが、アルゼンチンが負けた瞬間にカフェで試合を観戦していた人たちが大はしゃぎしていた姿を見て、サッカーに対するブラジル国民の思い入れの深さを垣間見た気がした。

国民の気質ということであれば、日本と韓国の共催で開かれた2002年の大会においても印象に残っている場面がある。日本チームのサポーターは、地元開催ということもあって連日にわたり熱い応援を繰り広げていたと思うのだが、それにも増して熱い視線を向けているように感じられたのが韓国チームのサポーターだった。最大で700万人にも上ったと言われる街頭応援者によって、町のいたるところがチームカラーの赤に染められている光景をテレビで見たとき、この熱気は日本ではあり得ないなあと思ったものである。

応援に熱が入りすぎてサポーター同士によるトラブルが発生し、問題となることもあるが、スポーツ観戦が趣味である私にとっては、ブラジルや韓国のそうした風景がちょっと羨ましくも感じられた。

#### 109 「学力を育てる」 亀貝一義 2006.05.27

岩波新書の「学力を育てる」という本を読みました。著者は志水宏吉さんという大阪大学の先生で専門は教育社会学だとのこと。今回は、この本の中で（学校の先生や、子育てのことをちょっと考えることのできる父母ならだいたい想像していることですが）「的を射ている」と思ったことを紹介しておきましょう。大学の先生の書はだいたい理屈っぽく「何を言いたいのか」と聞き直したくなるのが多いのですが、これは大学の先生らしくない人の書です（皮肉！！）。

子どもの学力形成のための家庭の意義についてですが、第一は子どもが家で勉強できるような環境をつくること。例えばいつでも家でテレビがついていれば落ち着いて子どもが勉強できます。第二は親が自分の勉強する姿を子どもに見せること。趣味でもいい。親が一生懸命何かをしている姿は子どもにいい影響を与えます。第三、親が子どもと「一緒に勉強する」機会をつくること。

そして学力の基礎をつくる習慣が大事です。そのために必要なことは、第一に基本的な生活習慣です。最近話題になっている「早寝早起き朝ご飯」を思ってください。第二は親子のコミュニケーション、第三は文字・活字との接触の機会を頻繁にもつこと、です。志水先生もいっています。こういうことを継続的に実践したなら、学力も家庭の「文化的階層」もアップできると。

上の6つに付け加えることもありますね。それは何でしょうか。それぞれのお父さんお母さんが考えてください。

この書についてはいろいろ示唆に富むことが多いのですが、それは別の機会に。

#### 110 『へんな子じゃないもん』を読む 木村玲子 2006.05.31

この魅力的な題名の本の著者はノーマ・フィールドさんといって、シカゴ大学教授の女性です。日本人の母とアメリカ人の父を持ち、日本で生まれて育ち、高校卒業度、アメリカに渡った方です。現在はシカゴ大学人文学部アジア言語文化学科長という長い肩書きをもっています。

1昨年10月から昨年9月まで1年間、小林多喜二の研究のため、おばあさんの故郷の小樽で過ごしながら、道内はもちろん、日本の各地で講演をしたり、雑誌、新聞に執筆や発言をしたりなどで活躍されていました。その間私の所属する文学会の例会に、ほぼ毎月顔を出して下さって、そのスケールの大きい、鋭くも柔軟なそして温かい思考をいかに発揮して下さったのです。私達仲間がみんなノーマさんのファンになったことはいうまでもありません。（特に男性は！？）

そのノーマさんの近著ということで早速購入して読みました。ノーマさんの人間愛に満ちた鋭い文明批評集とでもいったらよいでしょうか。1995年、丁度終戦50年を記念する夏の一カ月間、脳出血で倒れた敬愛するおばあさんの看病のために、東京で過ごします。その間に見たり、聞いたり、感じたり、思い出したりしたことを「私の小宇宙の軸であった明治生まれの祖母」を見つめながら考えています。

ジョギングの途中で出会うおばあさんはじめ、隣近所や身近な人を見つめる温かい中にキラリと光る眼差し。50周年特別番組の中で、スミソニアン博物館にあるエノラ・ゲイ号の前で「原爆を落としたのは正しかった」というアメリカ人に、想像力がおのれの狭い枠から出られないと批判したり、広島、長崎市長の原爆記念日の挨拶に思いを寄せたりしています。

表題は「おばあちゃま、へんな子をお医者さんに連れてゆくのはいやじゃなかった？」という問いかけに「へんな子じゃないもん、自慢の子だもん」と答えたところからきています。あとがきで「日本は・・・戦後民主主義を最終的に手放してしまう瀬戸際にきているようだ」「しかし、瀬戸際は瀬戸際。踏みとどまれないとは定まっていない。やってみようではないか、過去と未来の生き物のために」と呼びかけています。ノーマさんの人間味溢れた作品です。お読みになりたい方、お貸しします。

#### 111 「悩める子犬たち...」 杉野建史 2006.06.01

ティーンエイジの頃、何に悩み何に心躍らせていたのか…。

断片的な記憶はあるものの「どうして悩んだのだろう」と、今になって原因を追求しようと思っても、さっぱりわからないのである。おそらくこれが成長の証なのだろう。

人間関係は本当に難しい。このことを子犬たちは今まさに実感している。昨日まで良好だった関係が一晩寝るとしっくりいかなくなっている。こんな事をまさに経験している途中だ。心と頭で考えていることがなかなか一致しないというか、連動しないというか…。一度は納得できたことが違う面から納得できなくなってしまう、悩みの原点に戻ってきてしまう。ぐるぐる同じ事を考え悩み、しまいには自分を責めてしまう。「多感な年頃」と言われるティーンエイジ。言葉ではわかったつもり、頭では理解できたつもりでも、なんだかモヤモヤ悩んでいる自分に気づく。

大いに悩みなさいと言いたい。でも、悩んでいる子犬たちにこの言葉を使うことは、溺れている人に「そのまま溺れていなさい」と言っているのと同じくらい本人はとても辛いのだと思う。しかし、この道を選ばずには通れないことを人生の先輩たちはみんな知っているのです。通らずに大人になった人はいないはず。だから私は「大丈夫」と言えるのです。「大いに悩みなさい」と。

ティーンエイジを終えてしばらくすると、BさんやHさんのような年になると笑い飛ばせる。でも笑い飛ばせるのは、間違いなく君たちと同じ道を通ってきた先輩だから。みんなみんな溺れた経験は少なからずあるのです。

子犬諸君！ 「タフな体と丈夫な心」を心から願う！

今、2年生を担当することができて良かった。

#### 112 チューリップ 田房絢子 2006.06.06

幸いなことに今現在はそれなりに楽観的になったのだが、高校生の時はどうしようもないほど悲観的で寂しがり屋だった。あの頃の辛い時期を思い出すと、今も悲しくなる。と同時に、可笑しくもなるんだけど。

あの頃はなんとなく「夜」に気持ちが向いていた。夜遊びをしていたとか、夜寝ないでいたとかじゃなくて、闇の色がはびこる夜に気持ちも身体もうずくまっていた気がする。闇の中に沈んでしまいそうな、沈んでしまいたいような、そんな気持ちになった。

そんな悲しい気分を紛らわしたくなると、花屋さんに行った。自分の部屋に飾るチューリップを買うために。理由はわからないけど、必ずチューリップだった。見ていると、なんだか落ち着いた。落ち着くはずだと言いつつ聞かせていたのかもしれない。今となってはどちらでも良いのだけど、確実に効果はあった。

かわいらしく元気に咲く、青空が似合うチューリップに惹かれたのかもしれない。そんなチューリップに憧れたのかもしれない。私もこんな元気な姿になりたいと、願っていたのかもしれない。

あの、なぜだか途方に暮れていた時間も、世界が終わりに近づいているような顔をしていた時期も、今の私にとっては必要な時間だった。ひどく辛い時期だったけれど、それも私という人間の間違いなく一要素となって、今私は存在している。昔の自分がいて、変わろうとした自分がいて、変わった自分がいて、今の自分がいる。過去のどんなに些細な出来事を除いても、今の自分は存在しなかったのだろう。

今は、枯れ際が非常に切ないチューリップよりも、ドライフラワーになっても元気がすみ草やラベンダーのほうが好きになった。咲いている状態だけではなく、枯れるところまで考えることができるようになったんだから、私も大人になったものだ！あの頃は枯れ方まで考える余裕もなかった。「そりゃあるわけないよなぁー」と自分自身に苦笑。

今の辛さは必ずあなたの糧となるから。泣きたい時は泣いたらいいさ。大丈夫だよ。

#### 113 卓球魂 畑中紀世彦 2006.06.14

最近、自由が丘では卓球がひそかなブーム。その中で一番上手いのは高等部3年生のNくん。聞くとところによると中学校では卓球部に所属していたという。卓球にはそこそこ自身がある私は、Nくんに挑戦してみたがデュースの末に負けてしまった。悔しさもあったが、手応えのある相手とやりあえる嬉しさから後日再挑戦をした。またしてもデュースの末惜敗してしまった。口のピアスを飲み込んでしまうほど大喜びのNくん、その真剣な姿もまた嬉しかった。でもさすがに2連敗もすると悔しかった。「これはいかん、これはいかんぞ！」卓球魂に火がついてしまった。

週末、暇そうな親父を卓球に誘った。親父は学生時代から半世紀以上も卓球を愛し、御歳66才。現在は週に一度だけ、同年代が集まる地域の卓球クラブに行くのを楽しみにしている。そんな親父は喜んで私の誘いに乗ってきた。幼い頃は親父に卓球を教え込まれたが、一緒にやるのは中学校以来約15年ぶりだった。久しぶりに親父との卓球で数時間汗を流した。帰宅途中に酒のつまみを買物し、夜は久しぶりに親父と晩酌をした。昼間の話しや昔話に花が咲いた。Nくんと卓球がなかったら、こんな宴はなかったなあ、Nくんありがとう。

週が明け、体育でNくんに再戦を持ちかけた。快く挑戦を受けてくれたNくんと、広い中央区体育館の角で対一の真剣勝負。親父との練習の成果で、翌週の体育と合わせて私は2連勝。現在対戦成績は2勝2敗だ。次の対戦が楽しみだ。

#### 114 海を渡って 芳賀 慈 2006.06.15

アルゼンチンの首都ブエノスアイレスから北にバスで数時間、ロサリオという町に滞在していたことがある。そこは、あちこちに日本人のにおいが残っていた。特にクリーニング屋さんには日本の名前が多かった。「ティントレリア(クリーニング)大阪」だの、「ティントレリア中松」だの、廃墟になった小さなクリーニング店がいくつもあった。

20世紀の半ばに日本から大挙して移住した人の多くは、地方に渡って花やニンニクなどを栽培するか、街なかに住んでクリーニング店に勤めたらしい。言葉が分からなくても仕事になること、熱い蒸気の中で辛抱強く作業することを厭わなかったこと、仕事がいねいで期日を守ることなどが理由だと現地の移民が教えてくれた。やがて独立し彼らが店を持ったころドライクリーニングがやってきたそうだ。短時間で生地を傷めず仕上げられるドライクリーニングはあつという間に広がって、その技術を持たない小さなクリーニング店はどんどんつぶれていったという。先の廃墟は、その名残なのだろう。

そんな中生き残った店の一つに「ティントレリア中曽根」があった。経営者は2世のナカソネ・スサーナだった。クリーニングのカウンターの前にござを敷き灯籠を立てて、想像の日本を演出していた。アルゼンチンでは誰もが飲んでいるマテ茶はとても苦く女性の多くはお砂糖を入れるのだが、彼女は入れない。緑茶と同じ飲み方をしているということだった。

ロサリオの町の中心には南米各国の旗を飾った歴史記念館があり、多くの観光客が訪れる。「そこに飾っているアルゼンチンの旗は私のところでクリーニングしている。そうできるまで努力した両親を誇りに思う」。スサーナは、そう早口で言った。

#### 115 新藤が9人 新藤 理 2006.06.18

私のまわりには、9人の私がいる。

7人は2Fのデスクの周りに、もう2人は3Fの職員室に。マグネットかなにかの下になって、ドアや窓や鉄の棚に留められている。青い線で、赤い線で、時には変テコなセリフとともに異彩を放つ「新藤さん」たち...要するに、生徒が描いた似顔絵シリーズである。

何のマチガイか、彼らは授業時間中に誕生したりもする。さすがに授業を受けながら似顔絵を描かれたのではないが、「個人学習」に励んでいるはずの生徒の手元をよく見ると、どこかで見た顔が器用に現れて「できた！ ハイ新藤さん」などと手渡されるのだから参ってしまう。強く叱るわけにもいかず、こらこらちゃんと勉強せい...などとつぶやきながら、デスク横の棚にもう

一つ貼っておくことになる。

いつだったか、生徒のいない時に学園を訪ねたお客さんが、「なんだか、すごく生き生きとした雰囲気ですね」と言ってくれた。何かと思えば、3Fの目立つところに貼り出している似顔絵を見てのご感想である。「楽しい生徒さんたちなんですよね。一発で新藤さんの似顔絵だってわかりましたよ」と。これはこれは、思いもかけず学園のイメージアップにひと役買う(?)こととなったわが分身。気をよくした私は、少々紙が古びてきても、歴代の似顔絵たちをはがせずにいる。新作は、休み時間に生まれればなおよろしと念じつつ。

#### 116 「青春なのだよ～。これら全部が！」 杉野建史 2006.06.30

北海道の短い夏を待ちわびて、学園のアウトドア行事が目白押しだ。

先日、「輝け！第2回S J G大運動会」が北九条小学校の体育館で行われた。

この場を借りて、北九条小学校の御協力に心から感謝いたします。ありがとうございました。

さて、運動会は実行委員会を立ち上げ、短い期間の中で準備し、大成功に終わったのではないかと思う。運動が好きな生徒もあまり好きではない生徒も参加できるような競技が準備され、父母の方々も参加しての7種目に熱戦が繰り広げられた。

生徒の元気な姿を見ることができ嬉しく思った。準備期間中の実行委員の生徒たちは、放課後忙しい数日を体験した。感想の中で「充実感を得たがもう(実行委員は)やりたくない。」とのコメントがあった。このコメントは消極的否定的な言葉では決してない。それほど一生懸命に仕事に打ち込んだから出た言葉である。でもこれが「青春なのだ！」と心の中でやつきながらつぶやいた。楽しいこともちょっと辛いことも、とって辛いくとも全部バランス良く経験して「青春」が成り立つのだ。

この数週間、私は“青春の方程式”を導き出そうと思案している。何通りの方程式が出てくるかわからないが、目の前の生徒たちを見ていると何とか方程式らしきものが導き出せないかと思う。方程式に生徒を当てはめることが目的ではない。当てはめられるなどみじんも思っていない。なんだかすっきりせず、なかなか前へ進めない生徒に「これが青春なのだよ。この苦しみとあの楽しさと、汗と涙を... .. μ = 。だから今の経験全てが大切なのだよ。大丈夫。」と納得させられる一言をかけることができたらと思うのである。

「方程式」というよりは「青春理論」と言うべきか。魔法の一言はないとは思いつつ、代入すれば答えが出る公式もないとわかってはいるものの...

#### 117 歩く 芳賀 慈 2006.07.04

晴れ上がった太陽のもと、学園名物(?)強歩遠足が無事終了しました。まだ、正式な参加人数や記録については集計中ですが、総勢120人ほどの参加による一大イベントになりました。日ごろ遅刻が多かったり体調がすぐれない生徒たちも、何と今回は9割の出席率で、それぞれの気力と体力に挑戦した1日でした。

自由が丘で過ごした日々で、何が楽しかったか、印象に残っているかを卒業生に訊いたとき、いつもトップに来るのがこの強歩遠足です。真駒内から支笏湖まで33キロを歩き通すというこの企画、卒業しても参加したいという生徒もいるくらい、なぜか密かに人気なのです。水ぶくれをつくり、汗だくになっても、ねぎらってくれる父母がいて、一緒に歩いてくれるボランティアさんがいて、リタイヤしたい気持ちを勇気に変えながら歩く、それは強烈に脳裏に刻まれているようです。普段あまり触れ合うことのない生徒同士でも、気軽に声をかけあえられるというアウトドアならではの一体感もあります。

そして何よりゴールしたときの笑顔。これがすばらしい。スタート地点で見られる明るく元気な顔は、7キロ辺りを過ぎると少しずつ封印され、15キロ付近では嘔み付きそうな様相を呈してきます。その、苦しい時期を自身の力で乗り切った後、支笏湖でたくさんの拍手に迎えられる

喜びは、あの笑顔となり、思い出になり、自信に結びつくのでしょう。今回残念ながら完歩できなかった人も、その努力は同じように称えられています。

お忙しい中打ち合わせなども含めてご協力下さった父母の皆様、ボランティアの方々はこの場を借りてお礼申し上げます。どうもありがとうございました。また、大っ変お疲れ様でした。

#### 118 33キ口強歩 亀貝一義 2006.07.05

芳賀 慈さんのエッセイに続いて、「強歩」を取りあげる。札幌自由が丘学園の行事の中でこれほど生徒だけでなく父母にとっても印象に残るものはない。

第1回は1999年のことだった。この時には生徒16名と父母スタッフあわせて56名の参加だった。12名が「完歩」した。うち生徒は10名だった。

その後2年間は雨天などもあって実施できず、2002年が第2回。そして今回が第6回である。参加者数はおもいであるが、さまざまな準備と条件づくりも年々盛んになってきていることは言うまでもない。

今回(第6回)は総数120名に及ぶ学園の一大イベントだった。

33キ口にチャレンジしようという試みは、中高レベルの学校では他にないのではないだろうか。しかも多数の父母や、生徒の兄弟姉妹、あるいは卒業生までも含んだ壮大な学園行事のもつ意義は計り知れない。

この意義の第一は、なんといっても自分自身の「今一步の挑戦」そのものである。「今度こそ」とか「初めての体験を何とかやり遂げよう」という気持ちを具体的に発揮できることである。

第二は、1日の行動の中で、非常に多くの人との関わりができる。生徒同士や大人同士あるいは子どもと大人、日頃知らない子どもとのふれ合い、などなど。

第三の意義は、大自然とのふれ合いである。自然は人の心をいやし体にいい影響を与える。古人は「自然に帰れ」といった。7~9時間の中で、鳥のさえずりや小川のせせらぎを耳にし、木々の間をぬける風を感じる。

終わった時のお互いのねぎらいと拍手と、そして自分への感動。

来年もまたこの伝統的なイベントをいっそう盛り上げるためにがんばりたい。

#### 119 「応援のかたち」・その2 金澤拓紀 2006.07.12

2006FIFA ワールドカップ(W杯)ドイツ大会は、5-3のPK戦の末にフランスを降したイタリアが24年ぶり4回目の優勝を果たした。グループリーグを最下位で終えた日本であったが、決勝トーナメント進出への夢が断たれたブラジル戦からこの決勝戦までのわずか3週間足らずの間に、中田英寿選手の現役引退表明がニュース速報で流れ、日本代表監督はジーコからオシムへと替わった。一つの時代が終わってまた次の時代が始まるという極自然な流れではあるのだろうが、関心を抱いている人たちの間では、まだまだ余韻や感傷に浸っている者もいれば、新たな希望や闘志を抱いて2010年の南アフリカ大会に想いを馳せている者もいることだろう。

私自身はというと、グループリーグ初戦のオーストラリア戦で逆転負けを喫してからというもの、自分の中で応援の仕方にちょっとした変化があったように感じている。それまではどちらかというと、日本に勝ち進んでもらいたいという自分自身の想いを、代表選手を通じてぶつけていたような感覚があったので、終了間際の10分間で立て続けに3点を奪われ、試合終了のホイッスルが鳴って日本が敗れた瞬間は、とても塞いだ気持ちでテレビのスイッチを消してしまったのであるが、ジーコ監督や選手たちがどんなコメントをするのだろうと思って再びテレビを点け、「とにかく次に向かってやっていく」という彼らの言葉を聞いているうちに、結果はともあれ、この後の試合も日本代表選手たちを応援していこうという少し穏やかな気持ちに切り替わったことを覚えている。

誰かを応援しているつもりが、いつの間にか自分の思い入れの方が優先されてしまい、気が付けば相手の立場は二の次になっているということがよくあるのではないだろうか。「応援」を「支

援」という言葉に置き換えて考えてみても、そうしたことが時としてあるように思う。相手が望んでいることなのか、そうではないのか。優しく接するべきなのか、そっとしておくべきなのか、それとも相手のことを思うからこそその厳しい態度に出るべきなのか。相手やタイミングによってどれが正しいということは一概にはいえないし、その瞬間は相手に受け入れられなかった言葉や態度が、時を経て受け入れられたり、逆に拒絶されたりするということもあるだけに難しいテーマではあるのだが、だからこそ自分の言葉や態度について、時には振り返ってみるという姿勢を忘れないようにしたいと思う。

2006年のワールドカップは閉幕したが、地区大会が終わればもうすぐ甲子園（高校野球）も始まる季節である。相撲であれ、マラソンであれ、どんな種目でも観戦したい人なので、年がら年中「応援」する楽しみは尽きないのだが、妻からは「テレビを見る前に子どもをお風呂に入れてよ」と怒られる毎日だ。

## 120 また夏が来た 田房絢子 2006.07.25

3年ほど前、体の周りについてしまった余計なものを取り除きたくて、ある作戦を決行した。毎日1時間ほど、お目当てのスーパーまで大きなリュックサックをしょって歩いた。ヨーグルトだけ買いに行くにも、歩いて10分の便利さよりも1時間を選んだ。そして帰ってきてから、トレーニングビデオを見ながら筋トレ30分。普段の食事は野菜と水を中心に……。でもストレスにならないように週に1回だけ、大好きなレストランの大好きなハイカロリーディナーを楽しんだ。それこそ1200Kカロリー以上もあると思われる。それでもがんばった甲斐があり、2ヶ月で8キロの減量。作戦は大成功！

しかし、里帰りした私は、ほっとしたのか、気がおかしくなったのか、元の体型まっしぐらコースを辿ることとなる。この作戦も見事うまくいき、今では3年ほど前にあの作戦を決意したかつての私が復活となる。まさに悪夢。なんのための毎日だったのだろう……。と嘆いていても仕方ないので、また作戦を決行しようと思う。まっ、いつも夏が来ると思うんだけど。一昨年も沖縄に行くので痩せなくちゃと思いつつ、失敗に終わっている。今年もまた沖縄へ行くことになったので、今年こそは！とまた決心を固めた。……。思い起こせば、私の人生いつも細くなりたいと願ってばかりだ。いつになったらこの戦いは終わるのだろうか、いつになったら細くて小さい私を実現するのだろうか、同じことを考えては自分を元気づける。また来年の夏も同じ事を言っている自分がちらりと見えるのは、夏の幻想で……。